

依存症における

連携支援について

R5連携支援モデル構築事業等からみえてきたこと

大阪府こころの健康総合センター

1 連携支援モデル構築事業

(1) 関係団体への訪問

(2) 勉強会・事例検討会

2 OACの活動より 回復施設・自助グループ見学会

3 まとめ

(巻末資料)

★事例からみる連携イメージ

1 連携支援モデル構築事業

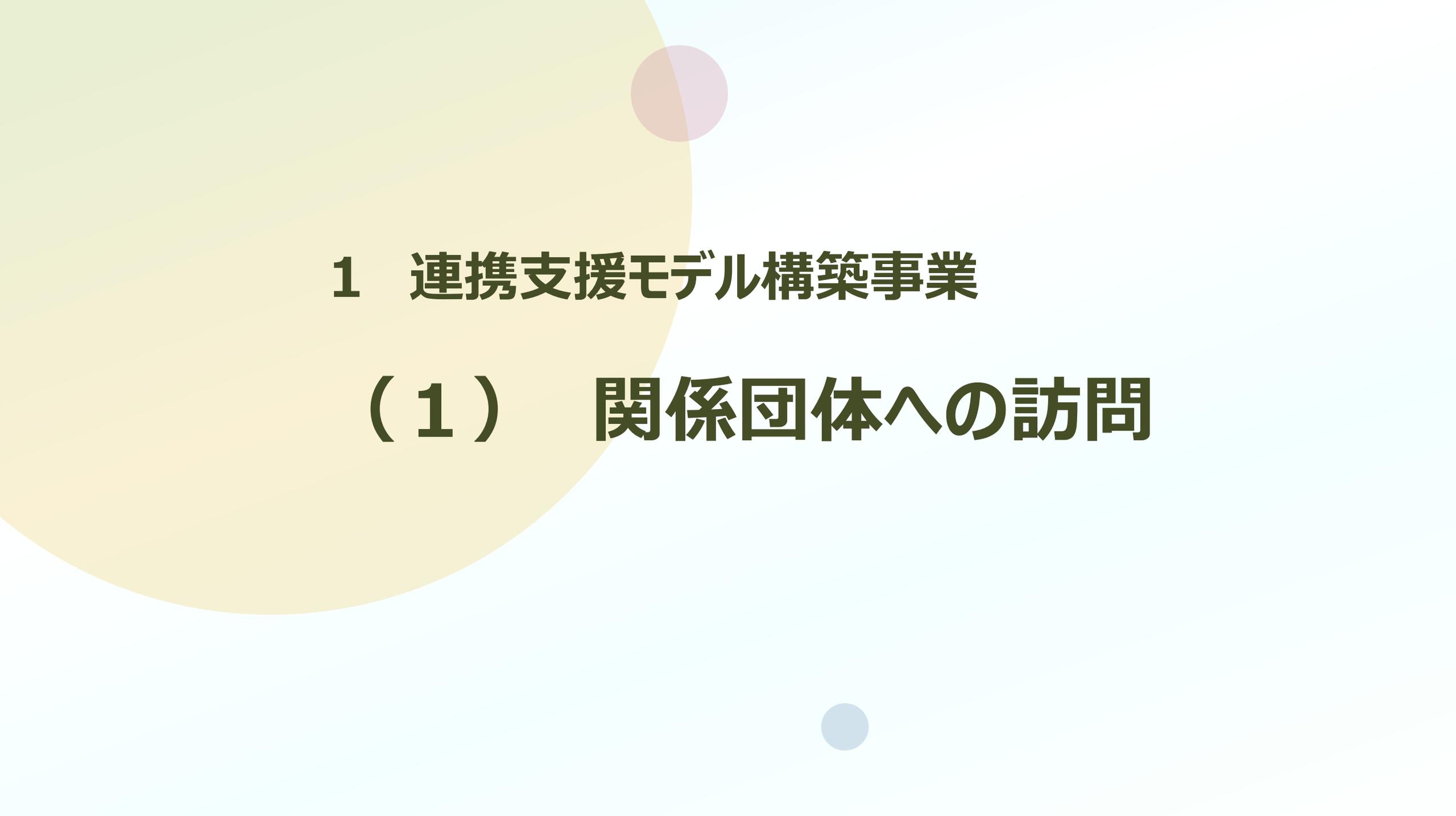
連携支援モデル構築事業について

【大阪府の依存症対策強化事業での位置づけ】

大阪府では依存症対策強化事業として、「普及啓発の強化」「相談支援体制の強化」「治療体制の強化」「切れ目のない回復支援体制の強化」「大阪独自の支援体制の推進」「調査・分析の推進」「人材の養成」の7つの基本方針を掲げている。このうち、本事業は「切れ目のない回復支援体制の強化」の一つに位置づけられている。

【事業概要】

主にギャンブル等依存症にかかわりのある関係団体から連携支援に課題のある事例を収集し、連携体制による対応策を検討するとともに、定期的なカンファレンス、コンサルテーション、継続的なモニタリングを実施して、適切な連携体制をコーディネートする。そして、事例を蓄積することで、複合的な課題のある事例にも対応できる連携支援モデルをつくることをめざす。



1 連携支援モデル構築事業

(1) 関係団体への訪問

(1) 関係団体への訪問 【いちごの会】

● 状況

- ・回復施設での利用者への生活支援や就労支援、相談支援を行っている。特に女性や高齢者で依存症を抱えた人もつながりやすいように支援に力を入れている。

- ・地域支援者が依存症について理解を深め支援ができるように、事例検討会や地域でのネットワーク会議の運営に力を入れている。尼崎市での「飲酒と健康を考える会」では市と一緒に、地域支援者対象の架空事例検討会を定期的を開催し、地域関係機関担当者の顔の見える関係を築き、自助グループとの関係も深めている。

- ・市民啓発や関係機関職員に対する研修、地域の関係機関ネットワーク会議という部分で積極的に行政機関と連携をとっている。

● 連携支援に関する意見等

- ・以前に比べて、行政機関の回復施設への認知度が低く、相談員と協働して依存症の方へ関わることなくなっている。個別支援において専門医療機関や自助グループ、回復施設との連携はあるが、困っている人が行政機関に相談した場合、回復施設にも紹介されるよう、相談の段階から連携するパイプづくりが必要と考える。

(1) 関係団体への訪問

【大阪いちちょうの会】

- 状況
 - ・借金問題を契機にして問題が顕在化することが多いギャンブル等依存症への関わりとして、以前からGA、ギャマノンと連携した多重債務相談を実施。
 - ・ギャンブル問題は「借金問題＋病の克服＋生活再建」の相談であり、債務整理にとどまらず、依存症治療へとどう結びつけるのか、今後も借金をしないためにどう生活していくことがいいのかを考えて対応。
- 連携支援に関する意見等
 - ・個別の連携を取る必要を感じた時には、さまざまな分野の相談員と連携をはかっているが、知っている相談員に連絡を取ることが多い。

(1) 関係団体への訪問

【大阪マック】

● 状況

- ・スタッフが当事者で、依存症からの回復のために12ステップのプログラムを使い、自助グループへの参加を勧めている。
- ・最近の利用者はアルコール依存とそれ以外の依存やその他の精神障がいが増加しており、従来の支援方法だけでは難しい面があり、スタッフは勉強しながら試行錯誤している。また、就労経験のない若年の利用者が増加しており、依存症からの回復に加えて、社会に出ていくための支援（就労支援など）が必要になっている。一方でマックの支援から卒業できない高齢者の課題もあり、高齢の依存症の方を受け入れる社会資源が必要になっている。
- ・機関連携としては大阪マックを関係機関に知ってもらうために、依存症にかかわる医療機関や大阪保護観察所、刑務所と連携してプログラムに協力したり、メッセージを運んだりしている。その活動は大阪府にとどまらず他府県にも行っている。
- ・大阪マックを知ってもらうため各地域のOAC地域交流会に参加し、その機会を利用して、他機関の支援者との関係構築をはかっている。

● 連携支援に関する意見等

- ・すぐの施設利用につながらなくても、回復施設を知ってもらうことが大切なので、種まきだと思って機関連携の活動をしている。

(1) 関係団体への訪問

【ギャンブル依存症問題を考える会】

- 状況
 - ・全国的な組織であり、都道府県を超えて活動を展開している。
 - ・依存症専門のオンラインメディア「Addiction Report」を運営している。
 - ・会員の多くはギャンブル等依存症の本人や家族で、「助ける者が助かる」という依存症者の回復原理より、様々な活動（啓発ツールの作成、政治への提言、家族の会と連携した相談会開催など）を展開している。
 - ・当事者支援部では、回復した若年層の依存症の本人が中心となり、オンラインミーティングや電話相談にて、具体的なアドバイスを行っている。
- 連携支援に関する意見等
 - ・関係機関と率先して連携し、回復のロールモデルとして依存症の本人や家族の回復に協力したい。

(1) 関係団体への訪問

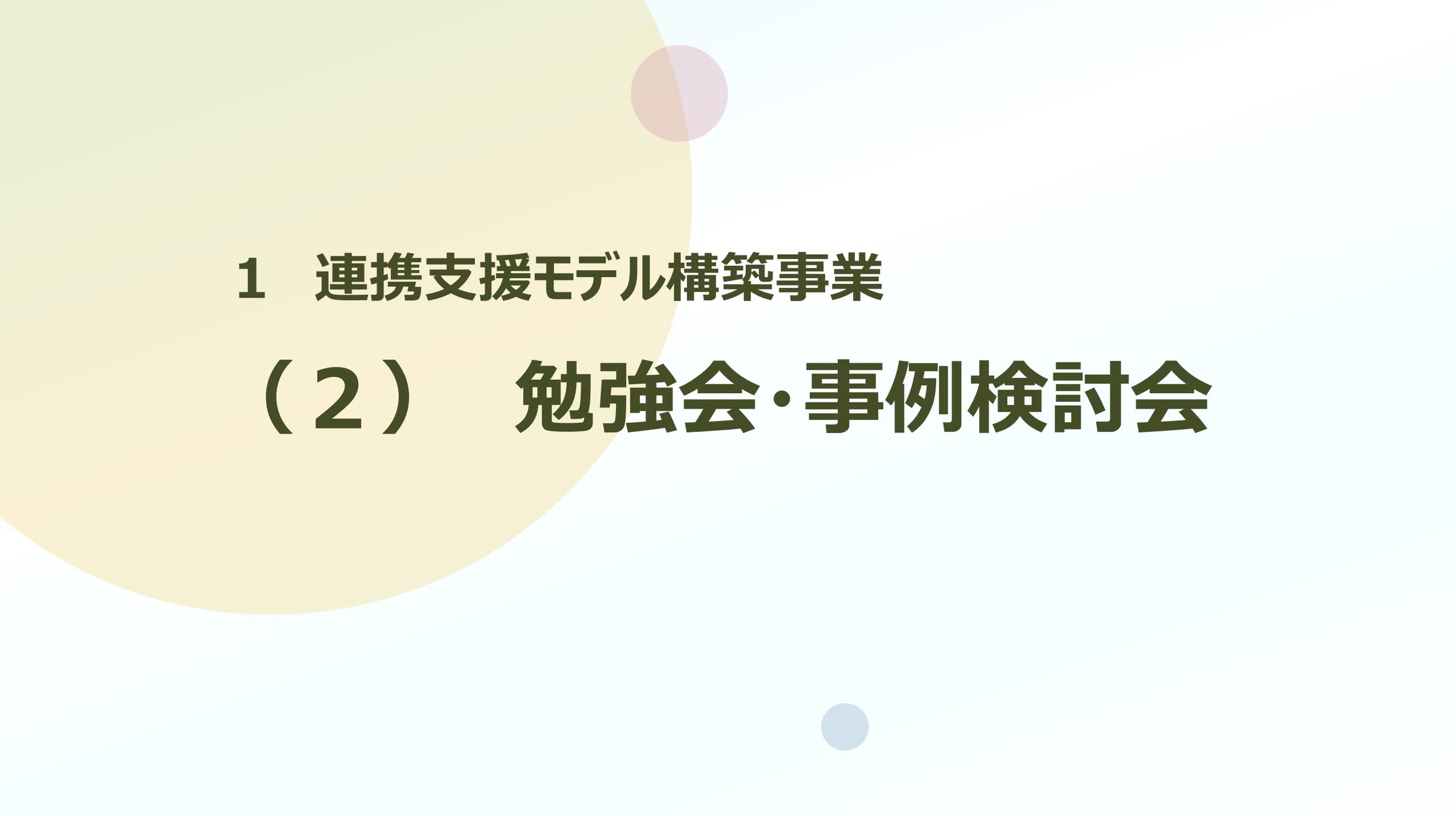
【全国ギャンブル依存症家族の会 大阪】

● 状況

- ・ギャンブル依存症問題を考える会の協力により、地域での相談会開催、その後の個別支援をしている。
- ・多くの会員は自助グループに所属しており、活動が自身の共依存からの回復にも役立っている。
- ・伴走支援といった形で家族支援をしており、手続き関係の同行、LINEを利用した相談が24時間可能で、即時会員からの返信がある。困りごとに対して具体的なアドバイスや支援をしている。
- ・家族の会を知ってもらい、関係機関との連携を図るため、各地域のOAC地域交流会に参加している。
- ・セミナーの開催や、教育機関や行政機関、鉄道会社、企業等の協力を得てカードや冊子の配布、ポスター掲示を行い、啓発を進めている。

● 連携支援に関する意見等

- ・行政に対し、個別事例を紹介する時には、相談者の了解を得た上で、情報を共有しながらお互いに連携をとっていくことを希望。



1 連携支援モデル構築事業

(2) 勉強会・事例検討会

勉強会（ミニカンファレンス）について

〈経過〉

関係団体の聞き取りの中で、医療機関との連携について課題があげられたことから、医療機関との連携を強化するために、医療機関における治療の実際や課題を共有する機会をもった。

〈内容〉

日時：令和6年2月28日（水） 15時30分～16時30分

内容：ミニ講義「ギャンブル依存症からの回復」

講師：東布施野田クリニック 医師 野田哲朗 氏

参加者：ギャンブル依存症を考える会・こころの健康総合センター

勉強会（ミニカンファレンス）の成果

- 少人数でざっくばらんに意見交換をすることで、現時点で医療機関が果たしている役割と、支援団体の困っている点が明確化された。
- 医療機関でギャンブル等依存症治療に取り組みにくい要因として、本人は経済的な問題を抱えて仕事が忙しく通院が難しい点と、集団療法のためのスタッフ確保が難しい点や診療報酬上の課題などがあることを共有した。
- 医療機関から自助グループへのつながりに関して、入院中から自助グループへ参加したり、治療プログラムの中で自助グループメンバーと顔合わせの機会を持つことなどが有用な可能性が示唆された。
- 医療機関との連携強化には、関係機関・医療機関が役割等について相互に正しく知ることが大切であることから、今後も対象を広げて勉強会を重ねていくことが必要である。

事例検討会について

〈経過〉

いちごの会の取り組みを参考に、機関連携の強化と支援者のスキルアップを目的に、架空事例を用いた事例検討会について、こころの健康総合センターが企画等を行い、八尾市保健所の協力を得て開催。

〈内容〉

日時：令和6年3月1日（金） 14時～16時

内容：①架空事例を題材に依存症に対する支援についてグループでの検討と助言者からのコメント

②専門医による依存症についてのミニ講義

講師・助言者：東布施野田クリニック 医師 辻本土郎 氏

特定非営利法人 いちごの会 佐古恵利子 氏

参加者：八尾市内の精神保健福祉等の関係機関職員

事例検討会の成果

- 地域関係機関の顔合わせができ、今後の連携につながるきっかけ作りになった。
- 依存症についての理解が深まった。
- 専門機関の利用についての理解につながった。
- 連携支援についての学ぶ機会となった。

参加者アンケートより抜粋（一部要約）

- ・多職種の方と顔を合わせることができてよかったです。これを機に、連携を深めていきたいと思います。
- ・個々の強みを知ることができる。自分の機関ができないことを連携してすすめられることを知ることができた。
- ・様々な業種の方のお話が伺えて明日からの業務も頑張ろうと思いました。
- ・所属によって重視するところが違ったため、いろいろな視点を学びました。
- ・「依存症の本人その人を見ていく」という姿勢をもつことの大切さを改めて認識しました。

連携支援モデル構築事業のまとめ

- 関係団体の訪問では、連携ができていることも多く聞き取れたが、関係団体は、行政機関等の相談窓口から各関係団体への丁寧なつなぎや、依存症問題を起因とする希死念慮等の精神症状悪化時の医療機関との連携等、さらに機関連携が必要であると感じている。
- 勉強会や事例検討会の実施により、連携支援についての理解が深まった。
- 本事業を通して訪問を重ねることで、それぞれの依存症支援についての役割や思いを共有することにつながったことから、機関連携においては担当者同士の顔の見える関係が大切である。
- 各団体がそれぞれ強みを活かした活動をしている中、関係団体同士の交流がより活発になることにより、さらに連携が強化されると考える。



2 OACの活動より

回復施設・自助グループ見学会

回復施設・自助グループ見学会について

〈経過〉

以前よりOACの取組みとして実施していたが、コロナ禍により数年実施できていなかったことや、関係団体の聞き取り中で、地域の相談機関からの紹介が少なく、つながりが希薄になっているのではないかという意見等から、本人や家族からの相談窓口である保健所等の職員が、回復施設・自助グループを見学することで普段の相談業務に活かすことを目的に、こころの健康総合センターが関係団体・自助グループの協力を得て開催。

〈内容〉

実施期間：令和5年11月～12月の間に14回実施

協力機関：7機関（大阪マック、大阪ダルク、いちごの会、大阪府断酒会、AA、NA、GA）

参加人数：府・中核市保健所の精神保健福祉担当者、こころの健康総合センター
延べ86名（実数56名）

回復施設・自助グループ見学会の成果

- 参加者が、自助グループや回復施設が依存症の本人にとって居場所やエンパワメントにつながっていることを体験的に理解できた。
- 参加者が、相談対象者に対する具体的な提案や丁寧なつながりについてイメージできることで、今後の相談対応の向上が期待される。
- 回復施設や自助グループの理解や具体的な連携に対して非常に効果があると考えられる。

参加者アンケートより抜粋（一部要約）

- 回復施設のプログラムの主旨や内容、また自助グループのミーティングの様子等を具体的に知ることができたため、相談者により具体的に回復施設や自助グループを案内することができる。
- 相談業務において、複合的な課題のある相談が多くなる中、支援担当者が回復者の声や回復過程を知ることができたことは、相談支援場面において非常に有効であった。
- 回復施設から来てもらい、保健所等での面接時に同席してもらえることが知れ、つながり方の幅が広がった。
- 相談者の見学時にはできるだけ同行したい。
- （見学先が依存症からの回復に果たしている役割について）ありのままで過ごすことのできる居場所。依存症の本人が孤独にならないように、仲間づくりの場や支え合う場だと思う。

3 まとめ

連携支援のまとめ

- 自助グループや回復施設は、それぞれが自分たちの活動について知ってもらえるような取り組みをしているが、支援担当者がより深く理解するためには、活動への見学や、参加を通して、具体的な支援内容を把握することが必要。
- 機関の役割とその機関に期待する役割に違いが生じると、連携が難しくなることがあるため、それぞれの機関の役割を理解することが必要。
- 地域における社会資源を知る機会や、支援担当者同士の顔の見える関係づくりのさらなる機会をもつことが必要。
- 支援担当者のスキルアップのために、事例検討会等、依存症支援についてより理解を深める機会をもつことが必要。
- 支援者が自助グループに同行する、自助グループから支援機関のプログラムに協力するというようなそれぞれの機関の間を埋めるような動きを各々ができる体制をつくり、切れ目のない回復支援が必要。

今後に向けて

- **依存症についての理解促進**

OAC地域交流会だけではなく、地域の実情に合った形で、依存症についての啓発や理解の深化を図る方法（既存のネットワーク会議で依存症をテーマに取り上げる、依存症に関する研修で回復者の体験談を聞くなど）を検討していく。

- **連携支援を経験するきっかけづくり**

ブロック単位で、連携支援をテーマとした事例検討会の機会を持つなど、支援者が具体的な支援方法を考えられるきっかけづくりを進める。

- **機関連携の強化**

機関連携の強化と支援担当者の支援力強化のため、回復施設や自助グループの見学会について見学先の拡充等を検討する。

- **機関間連携の促進**

今年度訪問した関係団体の相互理解を深めるため、施設見学や勉強会などの交流の機会を持つ。

(巻末資料)

★事例からみる連携イメージ

* この事例は、連携支援モデル構築事業を通して得た事例等から作成した架空事例です。

事例 1

(市役所の子育て部門の職員)



市役所の職員が相談者の家族のギャンブル等依存症の可能性に気づき、専門相談機関につなぎ、自助グループにつながった事例

- ・ 市役所の職員のAさんは、子どもの病気のことで来庁した相談者の話を聞き取っている中で、相談者の夫にギャンブル等依存症の可能性があると気づいた。
- ・ Aさんは、相談者にそのことを伝えるとともに、依存症の専門相談ができるところがあることを説明したところ、相談を希望したことから、その場で依存症の専門相談機関に連絡をしてつないだ。
- ・ 後日、相談者と面接した専門相談機関の職員は、依存症について説明し、相談者の夫へも相談を勧めてほしいことを伝えるとともに、家族だけでも継続して相談できることや、自助グループであるギヤマノンについて、以前に回復施設・自助グループ見学会に参加して見学した時の様子を含め丁寧に説明した。
- ・ 相談者はギヤマノンについて具体的にイメージすることができ、見学を経てギヤマノンにつながった。

事例 2

(地域の相談支援事業所の職員)

OACの交流会で関係機関の役割を知り、具体的に伝えることで支援につながった事例

- 相談支援事業所の職員Bさんは、日頃支援している利用者がギャンブルによる借金を何度も繰り返していることから、とりあえず専門機関へ相談に行くことを勧めているが、「そのうち行ってみます」と言うもなかなか行かず、どうしたらいいか困っていた。
- Bさんが職場で相談したところ、保健所で開催するOAC地域交流会に参加したことがある同僚から、OAC地域交流会に参加してみてもとアドバイスを受け、参加してみた。
- OAC地域交流会に参加したBさんは、依存症の方の体験談を聞いたり、グループワークで自助グループや民間支援団体や医療機関、保健所の職員と同じグループになり、それぞれの機関の役割を聞きながら、みんなで依存症の支援について自分たちができることを話し合った。
- 後日Bさんは利用者に、OAC地域交流会での体験を生かし利用者の気持ちに寄り添いながら、借金や依存症のことについて相談できる機関や自助グループ等について具体的に伝えるとともに、今後どうしていくか一緒に考えようと提案。
- しばらく経ってから、利用者から依存症の専門相談を受けたいと希望があり、Bさんが同行して支援につながった。

事例 3

(医療機関の職員)

1機関で支援していたが、事例検討会で各機関の役割を知り、関係機関にもつながった事例

- ・ 医療機関のケースワーカーのCさんは、地域で開催する依存症に関する事例検討会に参加した。
- ・ 事例検討会では、依存症の方の支援について、それぞれの機関が自分のところでできることや、難しいと感じることについてどんなことがあれば今より支援が進められるか等をグループで話し合った。
- ・ 様々な機関の取り組みや強みについて具体的に知ったCさんは、事例検討会終了後、参加していた関係機関の職員に、自院に発達障がい通院中で最近ギャンブルがやめられなくて通院が不定期になっている人について、個人情報伏せて概要を説明して相談してみたところ、本人が希望すれば一緒に支援できるので、本人に一度提案してみて、その結果をまた教えてくださいと言われた。
- ・ 後日、通院してきた本人にCさんから、地域で依存症に関して支援している機関や自助グループがあることを具体的に説明したところ、一度話を聞いてみるくらいならいいとのことだったので、Bさんから関係機関の職員に連絡して、本人と関係機関の職員が顔合わせを行い、支援につながった。

連携イメージからみるポイント

1. 依存症の専門相談機関ではない機関においても、依存症に関する知識をもつことで、相談者の困りごとの背景に、もしかしたら依存症にまつわる課題があるのかもしれない、という視点を持ち対応することができる。
2. 関係機関の役割や取り組みを具体的に知ることで、適切な機関について情報提供をすることができる。
3. 紹介するだけではなかなかつながりにくい場合もあり、関係機関の役割や取り組みを具体的に知り丁寧に伝えることで、相談者が具体的にイメージしやすく不安軽減になる。
4. 相談者が希望した際に、関係機関へ連絡を入れたり同行する等丁寧につながる。